國學院大學学術情報リポジトリ

# オンライン時代の神道研究と教育：神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：21世紀COEプログラム

| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」<br>公開日: 2024-06-24<br>キーワード (Ja): 170.4, 神道‖シントウ<br>キーワード (En):<br>作成者: 井上, 順孝, 色, 音, コベル, スティーブン, キーンレ, ペトラ, 小松, 和彦, ビュテル, ジャン＝ミシェル, ベンテリー, ジョン・R, 國學院大學21世紀COEプログラム<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.57529/0002000505 |

セッション２

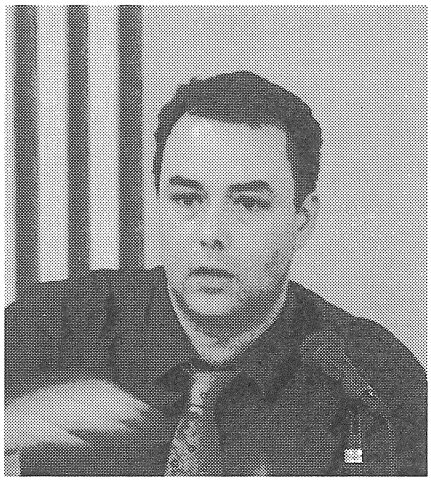
〈発題５〉

# ベルナール・フランク教授のお札コレクション

## ――インターネットによる日仏研究協力の事例――

ジャン＝ミシェル・ビュテル

フランス 国立東洋言語文化研究所助教授



**【司会（櫻井）】**　それでは時間が参りましたので、セッション２の午後の発題に移りたいと思います。

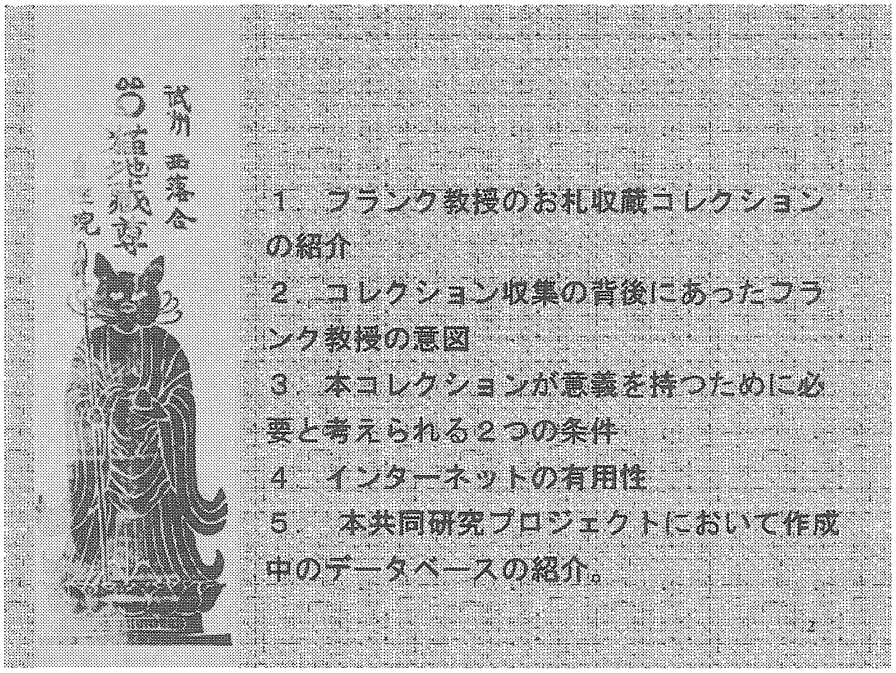
さて、発題５はビュテル先生のご発題で、「ベルナール・フランク教授のお札コレクション」という題でご発表いただきます。これに対して、コメンテーターとして平藤さんにお願いすることになっております。それではビュテル先生、よろしくお願いいたします。

## 発題

## ジャン＝ミシェル・ビュテル

**【ビュテル】**　ありがとうございます。ビュテルと申します。

まず国学院大学 21 世紀ＣＯＥプログラムの関係者の皆さまに、特に、井上先生と平藤先生に、今回のシンポジウムにご紹介いただきましたことに、心よりお礼を申し上げます。お二方には一昨年のフランスへの研究調査の際に初めてお目にかかりました。両先生がヨーロッパで行われている研究に関して非常に熱心に情報を収集されていることに大変感銘を受けました。そのときにお目にかかれたことがきっかけとなって、今回このように日本に来ることができたことをとてもうれしく思います。皆さまの進めておられる研究ネットワークの確立のプロジェクトは必ず大変な成功をおさめることと思います。また、フランスの研究者たちも―今日はハイエクさんとわたしと、フランス人は２人だと思いますが―



このプロジェクトに大きな関心を寄せており、ぜひ参加の機会があることを願っています。

さて、本日の私の発表においては、故ベルナール・フランク教授の収集したお札のコレクションについて、現在行われている日仏共同研究プロジェクトを通じて、シンポジウムの主題に関する考察を試みたいと思います。今日は千々和先生〔千々和到、事業推進担当者〕がいらっしゃいますので、とても緊張しており、簡単なことしか言えないかと思いますが、お許しください。

このフランク・コレクションについてのプロジェクトは、ＩＴ技術を駆使して、現在フランスの日本研究で最も野心的なプロジェクトのひとつとして行われていると思います。ちょっと大げさなように聞こえますが、フランスは、ＩＴ技術が非常におくれていて、ＩＴを使うプロジェクトが非常に少ないという状況ですので、我々のプロジェクトは、単純なものですが、フランスでは比較的大きなプロジェクトということになります。

こちらが今回の発表の項目となります。まず最初に、フランク教授のお札収集コレクションを簡単にご紹介します。コレクションの経緯、フランク教授の亡くなった後に開始された現行のプロジェクトの概要、そして現在作成中のお札のオンラインデータベースについてご説明したいと思います。次に、フランク教授自身がこのコレクションに込めた意図は何であったのかを探ります。さらにその意図に対して、あえてその意義が何であったかという問いに注目してみます。さらに踏み込んで、本コレクションが意義を持つために必要と考えられる条件は何であるかを検討することにします。また、そこで仮定した条件を成立させる上でどのような形でインターネットが役に立つかを説明します。最後に、本コレクションの内容を整理し、より活用できるようにする目的で、現在作成中のお札のオンラインデータベースについて、より細かく内容をご紹介し、研究の世界及び一般の社会のそれぞれに対してどのような有用性を持ち得るかについて考察を試みたいと思います。

こちらの研究所の先生方は既にこのコレクションについてかなりご存じのことと思いますので、この部分は簡単にご説明します。しかも私はお札の専門家ではなく、あまり知識はないので簡単な紹介しかできません。

日仏共同研究プロジェクトのフランス側チームのリーダーであるジョセフ・キブルツ先生は、フランク・コレクションについて二度にわたって発表をされました。そのうちの一回は、私の記憶が正しければ2004年だと思いますが、東京で行われたもので、「ヨーロッパに来ている日本のお札、その３つのコレクション」というタイトルの発表でした。もうひとつは史料編纂所が出版したもので、「Japanese Historical Documents and French Collections」というタイトルでした。日本からお札が初めて欧州に到来したのは江戸中期にさかのぼりますが、当時は散発的、またばらばらに到来し、珍しい物として好奇心から注目されることはありましたが、体系だったコレクションにまとめようという動きは全く見られませんでした。最初にコレクションと呼ぶにふさわしいものがまとめられたのは、明治初期の３名の重要な人物の協力の成果でした。これは、チェンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850－1935）によって16年間かけて収集されたものでした。収集の依頼

をしたのは当時オックスフォード大学のピット・リバース博物館の館長を務めていた人類学者のタイラー（Edward B. Tylor, 1832－1917）だとされています。

さて、コレクションに含まれているお札のかなりの部分はラフカディオ・ハーン（小泉八雲、Lafcadio Hearn）が、日本各地で行った巡礼の際に入手したものです。タイラー、チェンバレン、ラフカディオ・ハーン、いずれもほんとうに偉大な人物です。このコレクションは、400点のお札で構成され、現在もピット・リバース博物館に保存されています。

時間があまりありませんが、ピット・リバース博物館のホームページはほんとうにおもしろいので、少し紹介します。大学と違って博物館はやはりお客様向けなので、おもしろいホームページが多いのですね。残念ながら人類学博物館とか民俗学博物館になるとあまりおもしろくないかもしれません。たとえば、フランスの人類学博物館もホームページは一応ありますが、あまりおもしろくないと思います。ピット・リバース博物館のホームページ[1]には、たとえば、カタログのデータベースがあります。写真や物、マニュスクリプトを探すこともできます。非常に細かい検索もできます。

２つ目のコレクションはフランスの研究者、アンドレ・ルロワ=グーラン（Andre Leroi-Gourhan, 1911－1986）によって、パリのトロカデロの民族学博物館（現在、人類学博物館）のために作成されたものでした。彼が、ちょっと不思議なことですが、留学生として1937年から39年に日本に滞在していた間に収集した約900点のお札で構成されています。最初、ルロワ=グーランのコレクションはパリの博物館にありましたが、その後ジュネーブの博物館に行きました。今でも、パリの博物館にはルロワ=グーランの集めたものが、主に絵馬を中心に200枚ぐらいあると思います。あとはルロワ=グーランが持って帰った日本のお菓子がありますが、今はそれを食べた虫しか残っていないですね(笑)。それから、おもちゃもある程度あります。現在、ルロワ=グーランのお札は、ジュネーブ市の民族学博物館にありますが、その博物館が公開していないので、普通の人は見られません。ただ、国学院大学の千々和先生、平藤先生、太田先生〔太田直之、21世紀研究教育計画委員会嘱託研究員〕が11月ごろにまたジュネーブで調査をなさるとうかがいました。すごくおもしろいと思います。

３つ目がフランク・コレクションです。以上の３つ以外に、私が知っているかぎりでは欧州でお札コレクションとして知られているものはありません。フランクはコレクションの収集を1954年に始め、亡くなるまでの約40年間にわたって続けました。収蔵点数は1,000点を超えており、詳しくは、まだフランク先生の自宅にも少し残っているようでもあり、よくわかりませんが、全部で1,000点を超えており、ご本人が亡くなられた後で、フランク夫人である仏蘭久淳子さんからパリのコレージュ・ド・フランスのフランク研究所の研究者たちに寄贈され、現在もフランク自身が使っていたオフィスの部屋に大きな段ボール箱に集められて置かれています。チェンバレン及びアンドレ・ルロワ=グーランのコレクションと異なり、フランク・コレクションは博物館やパトロンなどの依頼によって

[1] http://www.prm.ox.ac.uk/index.html

作成されたものではなく、完全に自費で集められたものでした。また、専門業者による助力をほとんど受けることもありませんでした。チェンバレンもルロワ=グーランも骨董商などの業者からかなりの点数のお札を買い入れていたのです。それでいて、フランクのそれは３つのコレクションの中でも最も体系的・論理的な構成を持つものと言ってよいでしょう。同時にフランク自身が日本全国を歩き回って、2,000 カ所にのぼる神社仏閣にみずから参拝し、その足跡を形あるお札というもので蓄積したという個人的な体験の集大成でもあります。要するに、お札のコレクションを見ると、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）のように、フランク先生がいかに日本のことを好きだったのか、自分のためにいかに参拝することが大切だったか、ということがよくわかると思います。やはりこのコレクションを実際に見たときは感動しました。

しかし、単に個人的な趣味で集めたということではありません。日本における宗教のあり方の全体像をひとつの民間の媒体を通じて示そうというフランクの研究者としての知的な構想もまた、中心的な柱としてコレクション全体を貫いています。具体的に言いかえると、フランク・コレクションの最終的なねらいは日本人の表象の世界に存在する無数の神々をお札の図画を通じて示し、日本全国の何万という神社仏閣に祀られている神々の全体像をあらわそうというものだったのです。さらに、フランスにおける日本研究の流れをご存じの方もおわかりだと思いますが、この構想はエミール・ギメ（Emile Guimet, 1836－1918）により、ギメ博物館ですでに体現されていた系統に直接連なるものと言えます。ギメの場合は膨大な数に上る日本の神仏像のコレクションによって日本の仏教の「パンテオン」を示そうというのがねらいでした。

ギメ博物館のホームページもけっこうおもしろいと思いますので、少し寄り道しましょう[1]。いろいろ見ることができますが、残念ながらピット・リバース博物館と比べて、物のデータベースや写真のデータベースはないと思います。ですがバーチャルツアーというのができますので、ギメの仏教のパンテオンのほうに行ってみようかなと思います。こういうふうに、いろいろ博物館の中の風景が見えます[2]。２階に上がると、ギメが考えた仏教のパンテオンというものも見られます。一回りして、外には日本庭園もあります。このホームページで「東寺の曼荼羅」としてよく知られているものをみることができます。それは、本物ではなくて、ギメが日本に滞在したときに職人に注文したものです。こういうふうに細かく見て、バーチャルツアーができるというのはほんとうにおもしろいという気がします。このように、ギメ博物館では、ギメは日本の仏像を 700 点以上集めたと思いますが、今の博物館では 250 点ぐらい見られるようになっています。ギメ博物館が初めて博物館として開いたのは 1889 年ですが、これがその当時の風景ですね。ここにギメがいて、ここはちょっと見えませんが、フェリックス・レガメ（Félix Regamey, 1844－1907）という、ギメと一緒に日本に来て絵をかいた画家がいます。ここは、その人はだれなのかわかりま

---

1 http://www.museeguimet.fr/

2 http://www.museeguimet.fr/homes/home_id20638_u1l2.htm

せんけれど、とにかくギメ博物館のおかげで成仏したような顔をしていますよね。何か天国にいるように見えますけれども。

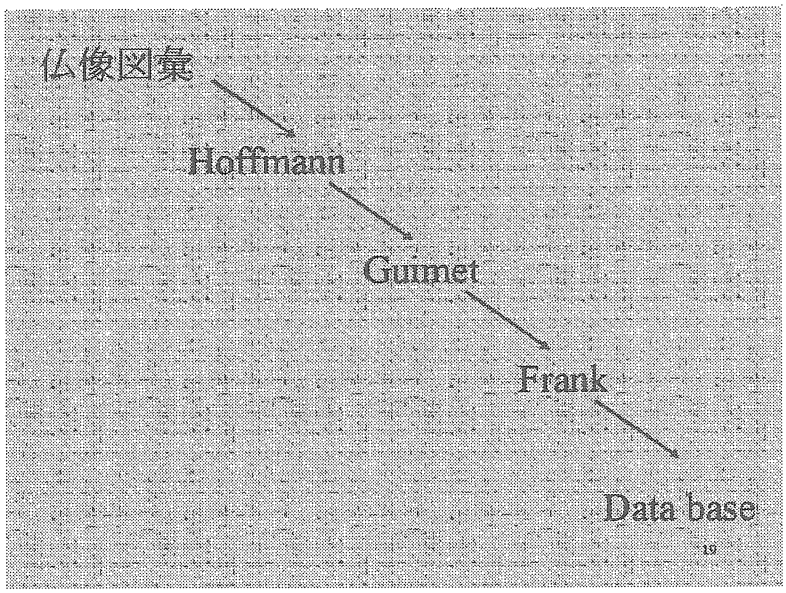
本題に戻りましょう。フランク・コレクションはまた 18 世紀の百科全書派以降フランスの大きな特徴をなしてきた「総括の精神」を重んじる普遍主義の伝統に根差しているという特徴を持っているでしょう。このような構想が多大な敬意に値することには否定の余地はありませんけれども、ここであえていくつかの疑念を感じざるを得ないということを申し上げたいと思います。これらの疑念というのは、より現代的な観点に立った場合に持ち得るものでもあり、また、同時に私自身の経験の不足と私が宗教史の専門家ではなく、民俗神道、民俗宗教と呼びならわされているものを中心的な研究対象としている民俗学の分野の人間であることによるものでしょう。一言で言えば、日本の津々浦々で祀られている神々は祀る者や参拝者のそれぞれに対して異なる顔と特徴を持ち、また一般的に人々は神々をその名前よりもその鎮座する場によって識別していることが知られているという現実を考えたとき、はたして、日本の神々のパンテオンなるものを描くことからして、そもそも可能なことであろうかという疑問が生まれうるのではないかと思います。

「パンテオン」という言葉は広辞苑とか日本の辞書を引くと、カタカナのパンテオンとフランス語のパンテオンの意味はある程度違うみたいですね。ただ、研究者同士で「パンテオン」というのはだいたい意味は決まっていると思いますが、もともとはその内部においてそれぞれの神々が固有の立場と役割とを持ち、それらが互いにかかわり合って構成するある種の秩序と構造によって成り立つ世界をあらわすものです。これは一体、日本の神々の世界にも応用が可能な概念なのでしょうか。私の見るかぎり、日本の宗教のあり方はそのような構造を持たないように思われるのです。ギメの仏像コレクションの構想はまだある程度わかるとしても、民間信仰に属するものまで含めた形で日本の宗教現象全体のパンテオンを構成しようというのは、さらに突拍子もないような考えではないのでしょうか。ここで選ばれた媒体、すなわち「お札」が民間の世界のものであるからというだけで、一般の人々の宗教観と宗教的な慣習、祭り方を把握することができるというわけではありません。お札のイコノグラフィーは、私の見た限りではギメ博物館の神仏像などと比較すれば単純に見えますが、基本的には知識階層の美学と宗教の伝統に基づいているものです。これはギメ博物館のおそらく一番有名な仏像だと思います。昔は図書室のちょっと上のところに置いてあったので、あそこで勉強した学生はみんな覚えています。左はフランク先生のコレクションのお札ですが、阿弥陀ですね、右と左。確かに単純化されたというか、ちょっと単純な絵ですけれども、それは民間がつくったモチーフとは思えません。しかも、フランク・コレクションのお札という二次元の世界でも、またフランク自身がそのカタログを作成したギメ博物館の神仏像コレクションの三次元の世界においても、日本の神々の全体像を図画像によって再現することの難しさは明らかです。

ここはちょっとギメ博物館の話をちょっと申し上げますが、この絵は逆さまになってます。ギメの意図は逆さまだったという意図を示したかったので（笑）。いや、ただの間違い

です。関係ない。とにかく、ギメ博物館のコレクションは主にエミール・ギメが 1876 年 8 月 26 日から 1876 年 11 月まで日本に滞在した期間中に彼自身によって収集されたものです。9 週間という比較的短い滞在の間にギメは主に 18 世紀と 19 世紀の作品から絵画 300 枚、彫像 600 本、書物 1,000 冊を集めました。フランスへ帰国してからもギメは仏教のすべての教派を網羅するべく、このように体系的に図像、作品を買い求めるという主義を継続しました。ギメがこれだけの数量の収集物を 3 カ月未満という短期間で、しかも整合性のある形で購入できたという事実は、彼が一定の構想を追求していたことを証明するものです。ここに簡単に書いてありますが、やはりギメがホフマン（Johann Josef Hoffmann, 1805－78）の *Das Buddha-Pantheon von Nippon* をかなり、踏襲しようとしていたことがわかります。ホフマンがやはり「パンテオン」という言葉を使っていますよね。ご存じのように、ホフマンはシーボルト（Philipp Franz von Siebold, 1796－1866）の弟子で 17 世紀、19 世紀の日本の膨大な量に上る図像画集である『佛像図彙』をもとにして、やはり日本のパンテオンを紹介しようとしていました。とにかくその『佛像図彙』という本はギメ博物館図書室にあるということは確かで、ギメが赤いインクで書き入れた箇所が少し残っていますので、ギメはやはりその本を見て、またホフマンの本を見て、自分の博物館を考えたということは明らかです。

ギメは信仰の対象である神仏諸尊を 4 つの基本的なカテゴリーに分類する作業を行いました。それは、仏陀、菩薩、明王、天、神です。さらにあと 2 つのカテゴリーの分類も行いました。博物館ではそういうふうに仏像が分類されました。ここはローマ字で書きましたけれど、フランク先生のギメ博物館のカタログの言葉を使いました。細かくは言いませんけれども、とにかく Nyorai-bu（如来部）、Bosatsu-bu（菩薩部）、Myōō-bu（明王部）, Ten-bu（天部）, Gongen-bu（権現部）、Kōso-soshibu（高祖・祖師部）のような分類です。ここで言いたかったのは、我々はデータベースをつくるためにある程度分類とか構造を考



えなければなりません。データが多くてどういうふうに分類したらいいのかわからなくて、けっきょくフランク先生の分類を使いました。フランク先生はギメの考え方を使いました。ギメはホフマン。ホフマンは『佛像図彙』――そういう流れの中で私たちはデータベースをつくっているということです。

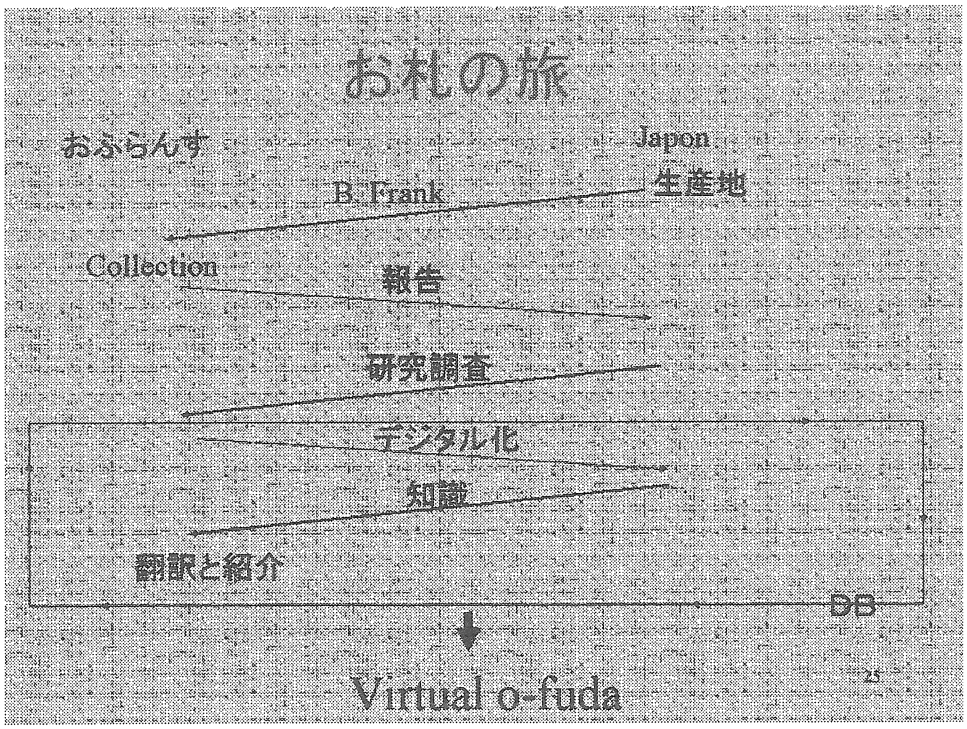
さきに二次元の世界でも三次元の世界でも日本の神々の全体像を再現するのは難しいと言いましたけれども、フランク先生の作成したギメ博物館の神仏像コレクションのカタログにおいて、神道の神々のあらわれる回数が大変に少ないという事実そのものがそのあらわれといえるでしょう。神道の神々の存在がカタログにおいて小さいということは、ひとつにはギメ自身の意向によるものであり、またフランクの受けた教育によるものでもありますが、それだけでなく、やはり神道そのものの性格によるものでもあることは、皆様もご承知のとおりです。この点はこちら国学院大学の皆さまの関心事項に重なる部分ではないかと思いますが、きのう、神社本庁の方と話したら、「最近の神道の美術」というシンポジウムだったか学会だったかがあって、やはり「神道の美術」という言葉を使うためには美術の定義をちょっと広げないといけないということです。すなわち、美術史によって扱われる崇拝対象がほとんど存在しない中で、いかにして神道を見せるか。または神道が確かに宗教のひとつであるということを美術の分野においていかにして証明するかというテーマです。確かにある程度神道と思われるものが入っていますが、カテゴリーとしては残っていませんし。このように見ていくと、私たちが敬愛してやまない、またその心根の優しさで知られているベルナール・フランク教授は、ひょっとするとややナイーブな考え方を持っていたかもしれません。あえて言えば、フランク教授の目指した構想は日本の事実からはずれていると私には思えるのです。このことはまた日本にこのようなたぐいのコレクションが存在しないということを説明する理由になるとも言えるのではないかと思います。もし私が知らないだけで、お札のコレクションというか、フランク・コレクションに類似のコレクションが日本にあれば、ぜひ教えていただきたいと思います。

では、いったいなぜフランク・コレクションにより開始された作業を現在私たちが継続しようとしているのでしょうか。偉大な先生へ敬意を表するためでしょうか。あるいは彼の作業の続きにみずからを投入することで、フランク教授から何かを学ぼうとしているのでしょうか。もしくは、固有の成果物を完全に近づけていくことの純粋な喜びによるものでしょうか。一方で、日本の研究機関として史料編纂所と国学院大学、特に千々和先生のチームが本共同プロジェクトに参画している事実は、フランク・コレクションの意義はフランスにおける日本研究の関心にとどまらないものであることをうかがわせるものです。

個人的な見解ですが、本プロジェクトが意義あるものとなるためには２つの条件を満たす必要があると思います。その２つとは、小松和彦先生の話で出たこととも関連すると思いますが、まず第一にコレクションにおけるお札の記述の精度が最も高い水準のものであること、二番目にはできる限り収集内容を網羅的なものに近づけることです。これらの条件が満たされれば、フランク・コレクションは２つの意味で有用性を持つことになるでし

ょう。すなわち、非常に限られた数であるが、一定の研究者に対して正確性のある参照ソースとなり、より一般的には、平均的な資料よりもより掘り下げた知識を提供する情報源となり得るというものです。

ここからの部分では、ＩＴ技術のツールがいかなる形でこの２つの条件および２つの有用性の表現に貢献しているかを検討していきたいと思います。フランクは日本の宗教全般に関する知識、中でも仏教のイコノグラフィーについてのたいへんすぐれた知識や知見を持っていましたが、私たちはもちろん同じだけの知識を持っていません。また、フランクが収集したお札とそのコレクションについて、どのようなビジョンを持っていたかは彼の散逸したメモやノートからその一部を知ることしかできないのです。私たちフランスの研究者は、ここにお集まりの皆さんのような日本の研究者のお力を借りなくては、フランク・コレクションについて大したことは何もできないと思います。お札の識別、祀られているのはどの神であるかを特定し、お札には何と書いてあるか、日本国内のどの地方のものなのかを明らかにするなど、データベースの精度を高めることにつながるあらゆる作業はフランスでは行うことができないと思います。これらはやはり日本から研究チームが実際にフランスを訪問することによってのみ可能となったのです。記憶が正しければ日本からの研究チームの訪仏は既に二回ですか。また 11 月にもう一回いらっしゃると思います。お札ひとつひとつのデータはデジタル化され、それを受けて、日本では博士課程とか学生の力もかりて、大規模なチームによる解読作業が可能となっています。日本で行われた作業



の成果は本プロジェクトによってつくられたインターネット上のデータベースにおさめられ、フランスの研究者はこれに自由にアクセスすることができ、フランク教授のコレクションに付属している資料から得られる知見に役立てることができます。

ここにちょっと簡単な図をかきましたけれども、お札の旅と言いましょう。お札はやはり日本のものですね。日本からフランク先生のおかげでコレクションという形でフランスまで来ました。フランスから日本へ「おーい、うちにはおもしろい札がありますよ」という形で報告して、今度、日本側は研究調査チームをフランスへ送りました。ここはたいへんな作業があったと思いますが、チームは10人ぐらいでしたでしょうか。

今度は日本の研究者は日本に戻って、お札もデジタル化された形で日本に戻りました。日本ではいろいろあったでしょうけれども、今度は日本の学者の知識はフランスにやって来ました。フランスでは、その知識というかデータを翻訳して紹介するということになります。最後の部分だけはデータベースのおかげでちょっと楽になるということが言えるでしょう。小松先生の考え方を使っていうと、その旅を経て日本のお札は「バーチャルお札」のような形になるのではないかと思いますね。要するに、もうフランスにも日本にもなくて、データベース、インターネットのお札になると思います。今度データベースができたら――ある程度できたのですが――情報がフランスから日本へ、日本からフランスへ早く回すことができます。

先ほど、フランク・コレクションの意義は約1,000点というその収集点数の大きさによるところがほとんどだと述べました。1,000 というのは日本に存在するお札の数全体から考えれば、ごくごく一部に過ぎませんけれども、西洋にあるお札のコレクションとしては最大規模のものです。日本にあるお札のコレクションと比較するとどうなるかは私にはわかりませんが、ぜひ教えていただければと思います。日本の宗教のパンテオンを示そうとするのであれば、やはりどれだけの数の神仏が信仰されているかを通じて、日本の神仏がどれだけ多種多様な状況にあるかを示そうとすることは不可欠でしょう。仮に、100点ほどのコレクションに限定してしまったとしたら、たとえばそれが最も代表的なものであったとしても、フランク・コレクションのお札の多様性が明らかにしている科学性が失われてしまうと思われます。しかしながら、従来の媒体の中で 1,000 点もの収蔵物を紹介し、しかも個々の収蔵物を結びつけ合っているさまざまなつながりについても明らかにすることのできるものは一切ないと言えるでしょう。たとえば、1,000 枚の写真を入れた本を出版するとか、展示物1,000点の展示を行うということは、必要なコストを考えるだけで不可能なことです。また、1,000 点のお札というのは決してお札のすべてではありません。したがって、フランク・コレクションのデータベースは必然的に部分的で不完全なものとなるわけです。これをだんだんと補足していくこともオンラインであれば可能かもしれません。また、ほかのコレクション、たとえば西洋のお札にあたるもののコレクションと組み合わせることも考えられるでしょう。実はこれについて、すでにそういった趣旨でコンタクトがとられていると聞いています。インターネットとオンラインの持つ可塑性により、

あらゆる形での移植が可能となるのです。

データベースの利用について、最後にもうひとつお話ししたいと思います。個人的には、このデータベースはできる限りオープンで、アクセス料金や著作権などは無縁なものであるべきだと思います。また、さまざまなレベルでの検索ができるように設計すべきだと思います。日本の宗教図像学の研究に取り組む研究者らによる専門的な利用はもちろんのこと、それほど日本の宗教に関して専門的な知識を持っていない研究者、また学生など、このデータベースを参照することで適切な表現の仕方、翻訳、訳語などの検索と確認をすることができるのが望ましいわけです。さらに、一般的に日本の宗教に関心を持つ人がだれでも利用できるようにするべきですし、視覚的に楽しむためにデータベースでサーフしてさまざまな図像を楽しむのにも向いている設計にすべきでしょう。

ここはちょっと遊びでそういうふうにしてみましたが、要するに我々はお札のコレクションを見ると、データはいろいろ持っていますが、そのデータはさまざまですね。色もさまざまですが。そのデータを分類するのが大変ですし、ひとつの形にまとめるのは非常にむずかしいです。でもとにかくインターネットを使ったらできるのではないかと思います。一昨日皆さんと一緒に神田明神にお参りしましたが、神主さんの話を聞いて、やはり似ていることがありました。というのは、日本の神道の神々は「八百万の神」といい、ほんとうにさまざまで簡単な説明はできない。たしかにまとまった説明はできませんが、インターネットだったら部分的な説明はできるので、非常に今の世界、または神道の世界とは合う方法だと。やはり、本などになると、ちゃんとしたまとめというのがないとなかなかむずかしいのですが、インターネットはまとめなくてもいいという方法ではないかと思われます。または、違うところから部分を借りて、たとえばほかのお札のコレクションまたは日本の宗教についてのデータベースとかを足すことができます。同じ形のデータベースではなくても、一体化することができます。そして、同じデータがあっても構造をちょっと変えて新しいことができると思います。実は私がデータベースに興味があるのはそのためです。要するに、フランク先生が考えた構造や分類というのは、Nyorai-bu（如来部），Bosatsu-bu（菩薩部），Myōō-bu（明王部）などなど、それはひとつの見方です。私はまた違う見方があればいいんじゃないかと思います。たとえば、ご利益別という分類をしたらどうかというように。同じデータですが、そのようにインターネットだったらいろいろと動けるのですね。ちょっとだけ基準が変わったら、またその形も変わるので、おもしろいのではないかと思いました。

あとは平藤さんも紹介されると思いますが、インターネット上でフランス語で日本宗教または神道関連のサイトを見てみますと、たとえば「神道」というキーワードでサーチエンジンを回してみると、まずヒット件数と情報量が驚くほど多いということです。それはインターネットですからある程度当然です。ただ、同時に私はびっくりしたのですが、コンテンツはどのサイトもかなり似通っているのです。サイトはサイトの内容を借りてまた新しいサイトをつくるとか、要するに同じ情報がいくつかのところにあります。私がかけ

てみたサーチでは合計 78,300 ページがヒットするという結果が出ました。それはフランス語のページだけです。けれども、その多くはアマゾン・ドット・コムとか――だから先生方の本とかも出てきたでしょうけれども――や音楽のサイト。何か Shinto というグループがあるみたいですね、ヨーロッパでは。それで音楽のサイトもよく出て、それからオンライン百科事典に含まれているものも一部ありますが、やはり個人サイトに入っている情報もかなりありました。私が見落としているのでなければ、専門的な研究機関が認める研究者によって書かれた情報は全くありませんでした。しかし、それでも私の予想に反して、掲載されている情報の内容にはそんなに大きな間違いはほとんど見られませんでした。平藤さんはもうちょっと変なところを見つけられたみたいですが、私はそんなに変じゃないというか、あのレベルだったら大丈夫という内容でした。ただ、最も驚きに値するのは、掲載情報のレベルが大変ベーシックなものにとどまっているということです。ほとんどすべてと言ってもいいほどのサイトが神道入門といったたぐいのものと言えます。ここにある情報はフランス語だけです。ヘイヴンズ先生のおかげで英語では、すばらしい情報があると思いますが、皆さんご存知のように、フランス人はみんな英語を読めるとは言えません。私もやはりちょっと苦手です。学生はもっとできない。要するに、学生が英語のサイトに行ったら、翻訳のソフトを使うので、それでまた問題が出てくるんですね。インターネットの利用によってより正確な知識にアクセスすることができないというのは驚きです。より学術的な知識にアクセスを開くサイトやコンテンツの必要性は明らかだと言えるでしょう。そこで、我々が考えたデータベースは、専門向けのデータベースですが、できるだけ一般の人も見られるデータベースになったらと思います。そのため、けさ紹介されたものと似ていて、やはり２つの構造というか２つの入り方を考えないといけないということになります。

それではデータベースの紹介をします（＊データベースは、現在一般には非公開）。このデータベースでまず、一般の人または学生のために考えたものは語彙の解説です。まだ少ししかできていませんが、フランク先生が考えた翻訳とか、フランク先生が書いた説明は参考になるために、紹介したらいいと思ってそういうふうにしました。たとえば、日本語では「世尊」という言葉があって、やはり「世尊」のように書き、読み方は「せそん」で、フランス語では celui que le monde doit vénérer en premier という説明があります。このように書いて、要するに学生が変な翻訳を使わないようにします。ここでは、もちろんキーワードでも検索はできます。たとえば「縁結び」と入力すると、ここに読み方とか説明もある程度書いてあります。どのように翻訳できるのかという説明もあります。あくまでも研究者向けの、または学生のためのデータベースですので、新しい言葉を入れたいなら、このように日本語やフランス語で説明や記録ができます。それから、非常に大切な部分だと思いますが、参考文献については、また違う形でデータベースをつくり、たとえば、阿弥陀だったら阿弥陀についての論文とかはどこにあるのかをもう少し詳しく紹介します。午前中のセッションでの小松先生への質問と関係があると思いますが、要するに学生がま

ず「阿弥陀」って何なのか探して、阿弥陀は「Amida」で訳してくださいと言います。語彙解説を見て。もうちょっと知りたいなら、参考文献までということですね。それから、日文研の妖怪データベースとまでとはいきませんが、やはりデータベースだけでなくて、このデータベースのつくり方、このデータベースの考え方について、またこのフランク先生のお札のコレクションについては、今まで我々のチームの人が書いたものを公開するという形にします。だから今日の発表もこういうふうに載せてあります。では、さっそく入りましょう。

いちおう、日本の方もフランスの方も同時に使えるデータベースをつくらないといけないということだったのです。ご存じのように英語と日本語だったらそんなに問題ないし、英語とフランス語だったら問題ないのですが、フランス語と日本語というのはまた難しいところが出てきます。苦労して、完璧ということではないのですが、ある程度フランス語も日本語も使えるデータベースになりました。ここには分類の説明があります。たとえば、Nyorai-bu（如来部）だったら如来はどういうものなのかということを説明しています。それはフランク先生が書いたこのカタログのために書いた説明です。だからそんなに詳しくは書いてないかもしれませんけれども、一応フランス人またはフランスのレベルとしては非常に参考になるものだと思います。ここに、ギメ博物館も同じですけれども、阿弥陀如来だったらＡ－２、薬師如来だったらＡ－３、そういうふうに分類されてあります。じゃあ、阿弥陀如来に行きましょうということになると、このようにして、阿弥陀如来のお札が出てきます。全部で 42 枚ということです。今個人のサイトに載せてあるので、ここはまだちょっと小さいのですが、そろそろまた新しいサーバーを借りて、もう少し大きくする予定はあります。このように、お札が大きく見られて、そこにはいろいろなことが書いてあります。名前や発行された場所、お札に書いてあるものとか、または簡単なものですが、どういう模様なのか、そのお札の機能やお札の特徴、または縁起・由来など。ここには何にも書いていませんが、またデータベースをつくって情報を日本からもらったら入れるようになっています。そしてここにやはり参考文献というものを入れます。あとは、フランク先生がお札だけじゃなくて、お札のお寺とか神社のパンフレットをもらったり、はがきを収集したり……。あとは、日本側からの要求で、だれが記入したのかをわかるようにしました。要するに、だれがいつその情報を入れたということが、非常に大切だという意見がありました。

だいたい以上です。すみません。長い話になりましたけれども、ありがとうございました。

# コメントと質疑応答

**【司会（櫻井）】**　ありがとうございました。それでは、さっそくですが平藤さんのほうからコメントをお願いいたします。

**【平藤】**　国学院大学日本文化研究所の平藤と申します。時間があまりないようなので、簡単にコメントをさせていただきたいと思います。

ベルナール・フランクという人は日本でも大変有名な方です。フランスの日本研究は、その初期の段階ではいわゆるジャポニズムとの関連もあり、研究というよりも日本趣味あるいは東洋趣味の段階にとどまっていると評される時期が長く続きました。その段階を大きく脱却し、日本人の研究者と対等に研究活動を行うようになった最初の研究者がベルナール・フランクだと言われています。そのフランク以降、ビュテルさんも含め、ビュテルさんの先生であるフランソワ・マセ先生など、日本の研究者にとって刺激的な研究をされる方が出てきています。

今回のビュテル先生の発表はそのフランクのお札コレクションに関するもので、フランクの広汎な研究の中でも特に仏教の図像学的な研究と深く結びついたものだったと思います。このフランクのお札コレクションは、ビュテル先生のご説明によると、日本の神々のパンテオンをつくるという意図によるものだということだそうです。お札によって日本人の宗教観の全体像を示す。そういう構想をフランク先生は持っていらして、それでお札コレクションがつくられていったという話だったと思います。ビュテル先生は、その構想自体に疑問を呈してらっしゃいました。それはビュテルさんが縁結びの民俗学的な研究をされ、実際の民俗の現場を見ていく中で、日本人の宗教世界をひとつのパンテオンとして再

構成することはできないのではないかとお感じになったからだと思います。私もその点については賛成だと思いました。フランクが集めたお札というのは発行された時期もばらばらですし、地域もばらばらです。いろいろな時代のいろいろな地域のお札を集めて、それによって日本人の宗教観の全体をあらわすことは難しいのではないか、というふうに思いました。

そこで、質問なのですが、フランクは日本のパンテオンをお札によって示したかったということでしたが、フランク自身は集めたお札をどのようにして公開したいというふうに望んでいたのか。さっきもビュテル先生から見せていただきましたが、ギメ美術館に展示されている「東寺の曼荼羅」は、仏教の曼荼羅の世界観を仏像でもって立体的に三次元で表現しようという試みで構築されたものでした。それによって、日本人の仏教観、曼荼羅観というのを表現したい、そういう構想だったと思います。フランクはそれに非常に影響を受けていたということですが、同じようにして目に見える形でお札を展示して、それで日本のパンテオンというのを表現したいというふうに思っていたのでしょうか。今回のこのお札のプロジェクトというのは、フランクが構想した日本宗教のパンテオンをネット上に再現しようという目的を持って行われているものなのでしょうか。これが第１点です。フランクがどういうふうにお札を公開したかったのか、その意図とビュテルさんたちの目的との関係をあらためてお聞きしたいと思います。

２番目の質問ですけれども、フランク・コレクションの今後の利用に関する質問です。ビュテル先生もおっしゃっていたように、コレクションのデータベースはより開かれるべきだと思います。今はまだ公開の段階にはなっていないようですけれども、研究の広がりを考えれば、より付加情報を付して、授業の中などにも取り入れていくことができるのではないかと思います。そこで、ビュテル先生はこのデータベースを自分のご研究の中にどういうふうに取り入れようとしていらっしゃるのか、自分の民俗信仰に関するご研究にこのデータベースがどう利用できると思っていらっしゃるのか。また、授業の中で利用するという場合の具体的な利用法について今考えていらっしゃることがあれば、教えていただきたいと思います。

３番目の質問です。先ほどビュテル先生は、「Shinto」というキーワードで検索するとかなりのヒット数と情報量があるということをおっしゃっていました。この点について私の関心から述べさせていただきます。最近フランスでも日本の宗教や神話に関して、若い人たちからの関心が高いと思います。これは日本でも同じ状況でして、日本でも神話や宗教に関して知りたいと思う学生が多いです。その背景には何があるかといいますと、私の考えでは、漫画やアニメ、コンピューターゲームの中に神話や宗教に関する題材が多く使われるようになっており、そうした状況と結びついているからであると思います。それがフランスにも翻訳され、フランスでも紹介されていて人気を得ているということでしょう。今画面に出ておりますのは「漫画とアニメにおける神話の影響」というフランスのサイト

です[1]。ここにはたくさんの神話を題材にした漫画・アニメが掲載されています。このほとんどが日本のものです。「Ah! My Goddess」というのは「ああっ女神さまっ」というタイトルで人気だった日本のアニメです。最初にあるのは、「3×3 Eyes」と書いてありますけれども、これで「サザン・アイズ」と読むもので、やはり日本で人気だった漫画です。この中にはシヴァとかエジプトの神が出てきます。次の「Blue Seed」というのも日本の学生たちはよく見ているものらしいのですが、これもこの情報によりますとフランス語に翻訳されているそうです。この話が神話とどういう関係があるのかというと、スサノオが出てきて、クシナダヒメが出てきて、河童が出てくるという内容なのです。そしてこの画面の「Susanoo」というのをクリックすると、スサノオについての説明やスサノオとクシナダヒメの神話の紹介が書いてあるわけです。こういうのは、おそらく専門家・研究者がつくっているサイトではないと思います。日本の漫画を見て、その漫画に日本の神話がどういうふうに関係しているのかということに関心を持ったおそらく若い人が作っているのでしょう。フランスの INALCO で学ぶビュテルさんの学生たちも、こういうものを見て日本の宗教について関心を持ったりしているのではないでしょうか。

ではこのような状況の中で、日本の神話について、どういう情報が出ているかということでフランスの Wikipedia を見てみましょう。ここに「日本神話」という項目が立項されています[2]。訳しませんが、『古事記』のことが紹介されていて、さらにここで、神道のことを Shintoshu というふうに書いています。Hotuma Tutaye と Nihonshoki、については、神話のいろいろなバージョンが載っている本であるという紹介があります。『ホツマツタエ』(『秀真伝』) というのは日本人の研究者、神道について少しでもご存じの方でしたら、これが偽書で大変怪しい本だというのはわかると思いますが、こういうのが基本的な情報として載っているわけです。実は、これはフランスだからこのような間違った情報が載っているのではなくて、日本の学生が見るような日本のサイトに出ている情報もこれと大差ないと言っていいと思います。

さて、フランスのサイトで神話についてのフォーラムがありまして、その中に日本神話についてのフォーラムがあります[3]。いくつかのスレッドがあり、日本の神はどういうものか、なぜ日本の神はいろいろな現象に存在するのかなど、さまざまな質問があります。この質問について、日本神話に関心がある人たちだけで情報のやりとりがなされているわけです。そこには研究者は介在していなくて、彼らだけの会話になっています。こうしたサイトをみると、研究者抜きでネットの世界というのはどんどん進行しているというふうに感じます。これは、日本もフランスも同じで、フランスだから間違った情報がネットに流れているのではありません。わたしは、こういう情報環境の中で、フランク・コレクションのデータベースが公開されるという意義は非常に大きいものだと思います。なぜならそ

---

1 http://www.eleves.ens.fr/home/aze/anime/mythes/
2 http://fr.wikipedia.org/wiki/Mythologie_japonaise
3 http://forum.aceboard.net/40490-1378-0-Mythologie-japonaise.htm

れが研究者の発信する非常に学術的に信頼性の高いデータベースであるからです。

ちょっと長くなってしまいましたが、こうした状況を踏まえてお聞きしたいのは、怪しい情報が飛び交うネット社会で情報収集をするということが当然になってきている学生に対して、日本宗教に関する授業をする上でどういう困難があるのか、具体的にネットに関する情報収集について、対策していることがあれば教えていただきたいと思います。ご発表は「日仏の研究協力」というテーマですから、同じ情報環境の中で同じ悩みに直面している研究者どうしとして、こういう点でも協力できることがあればと思い、質問させていただきました。長くなりましたが、以上です。

**【司会（櫻井）】**　はい。ありがとうございます。今、質問が３点ございました。時間の関係もありますので、申しわけございませんが、非常に手短にお答えいただけませんでしょうか。もし、時間がちょっとでもあれば、質問を会場の方にも少し残したいと思いますので、できるだけ３点に絞ってお答えをお願いいたします。

**【ビュテル】**　第１はとても簡単です。要するにフランク先生がどういう形で見せたかったかということですが、私は知りません（笑）。直接には聞いてないです。ただ、仏蘭久淳子さん――フランク夫人が一生懸命がんばってそれが本になるように力を入れていますので、フランク先生もやはり本の形でということがあったのではないかと思います。千々和先生がご存知ではないかと思います。とにかく本にすることは、フランク先生の奥様にとってはすごく大切なプロジェクトです。

あと２点目は、私がどういうつもりで参加しているかということですが、やはりパンテオンそのものを見せるためにというのではありません。パンテオンと考えるとやはり何か古くさいオリエンタリズムというイメージがあるんですね。我々はそうではなくて、やはりちょっと違う見方で見せたらいいというつもりで参加させていただきました。それとやはり本という形での公開でしたら、我々はまだ若いので、10枚ぐらいの論文を載せてもらうだけでしょう。それだけですね。インターネットだったら、自分の考え方をよりはっきり入れられるのではないかと思いました。特に偉い先生方はだいたいインターネットは使えないので、我々若者ならばもうちょっと自分の意見を入れることができると、簡単に言えばそういう考え方もありました。私自身が見せたいのは、生きているお札というか、日常生活のレベルでお札というものはどういうものなのか、そういうことです。とにかく、データベースをつくっても本になる可能性もあるし、博物館にはならないですが、展示することは考えられます。

３番目は学生のフォーラムとか、そういう問題だと思いますけど、昨日のコベル先生の専門家的な指導をやらないといけないという話を本当におもしろく聞きました。なるほど、インターネットはそのまま使えない、それなら学生にどうして使えないのかをちゃんと教えないといけないということがわかりました。そこまでは考えてなかったのですが。あとは「私もインターネットでいろいろ見ないといけない、大変だな」と思ったら、学生に聞いて、学生が自分でインターネットで調べて、あとは学生から情報をもらうということで

したね。要するに私がインターネットで探すわけではなくて、学生に探してもらうということですね。それはすごくいい工夫だと思います。特にアニメの世界とかいう世界だったら、私より学生がよく知っているので、学生が調べ、私は「ちょっと、気をつけよう」と言う。そういう方法になるという気がします。

**【司会（櫻井）】**　ありがとうございました。どなたか、質問……。はい、お名前をおっしゃっていただいて、お願いいたします。

**【遠藤潤】**　国学院大学の遠藤です。コメントになるのですが、２点ほどお話をさせていただきたいと思います。

日本の研究状況からフランク先生の業績を見たときに、私が一番特徴的だと思うのは、その形のバリエーションを理解する上でフランスの神話学的な仏教の研究、仏教説話というものに対して、教典に基づきながらそのコンテクストを理解していく。物の形を理解するときにも、その神話的な研究というものを前提にして説明をしているところが、日本の研究者から見ると非常に刺激的に映るのです。ですから、フランスではそのような学問伝統が一般的であたりまえのように感じられるかもしれませんが、日本の研究者の目から見ると、そこがフランク先生の業績としてはとてもおもしろいところだと思います。

それから、もうちょっと実務的というか、仕事の面で少しお話をさせていただくと、このデータベースをつくるときに、調査の中間プロセスとしてこれをとらえるというのもひとつの考え方かもしれないと思いました。フランク先生のコレクションの性格を考えることも重要ですが、そこで集められたお札は1,000枚もあり、その全部を展示するのはたいへんなことだというお話でしたね。その状況をふまえたうえで、次に何をしようかと考え、他の機関が所蔵しているものと比較をしようというときに、データベースにどのような機能が必要なのかということを考えることが必要なのではないでしょうか。具体的には、仏像などの場合、わりと手の形とか、身につけているものとかで特徴的なものがありますね。そういうものをある程度類型化をして、言葉の形で検索できるようにしておく。1,000枚の図像を比較して見るというのは非常にたいへんな作業でしょうが、形の上である程度ティピカルなものをデータベースとして反映していただけるならば、ほかの機関から利用する場合でも、形を比較することはかなり容易になるのではないか。それ自体が非常にたいへんな作業なのですけれども、そういう使い方というか、考え方もあるのではないかと思いました。ご発表で名前が出ていた、江戸時代の『佛像図彙』という本が、仏像の最も特徴的な形をカタログみたいに見せて「これは阿弥陀だ」というようにわかる図鑑のような構成になっていますので、それを参考にした方法というのも少しやりようがあるのではないかと思いました。

**【司会（櫻井）】**　ありがとうございました。それじゃ、あとおひとりだけ、もしどうしてもという方。はい。千々和先生、お願いいたします。

**【千々和】**　国学院の千々和です。今日はどうもありがとうございます。

意見のようなものはもう時間がないでしょうから、後でもしお許しいただければ、総合

討論の中で少し述べさせていただきますが、２つだけ。ひとつは、これは私の理解との違いの部分になるのですが、ビュテルさんのお話、それから平藤さんのコメントでも、「フランク先生の集めたお札は時代もばらばら」というふうにおっしゃったのですが、それはちょっと私の理解とは違います。チェンバレンは1900年前後、それからルロワ=グーランは1930年ごろ、フランクさんは1970年代が一番多いというふうに思います。ごくわずか江戸時代のものも、これはたぶん購入なのでしょうけれどもありますけれども、フランクさん自身がお集めになったのはほとんどが1970年代だと。私の思いは、チェンバレン、それからルロワ=グーラン、それからフランクで、日本をある時間軸に切ってそのお札を整理することができるというふうに考えています。これがひとつ。

もうひとつは、ビュテルさんのお話を聞いてすごくおもしろかったのは、要するにフランク第２世代がご発言になったということですね。フランク先生の直接の教え子の方々はやはりフランク先生は神様のようにというか、フランク先生のやったようにというふうなのがお札の整理だったのですけれど、ビュテルさんの今日の話はそうじゃなかった。ただ、私はフランク先生の方法をものすごくおもしろいと評価している、お札についても。と思っているのは、仏像だと見えない伝説とか伝承とか、民衆がそのお札をとらえたそのとらえ方というのが、お札からわかるというふうに『仏教曼荼羅』の中でお書きになっておられると思います。このあたりはビュテルさんのご専門とおそらく非常にかかわるのではないかと思うのですが、そのことについてのコメントは今日はございませんでした。これについて、今は返事の時間もないでしょうから、後の総合討論のときにでもまたうかがいたいと思います。どうもありがとうございます。

**【司会（櫻井）】**　どうもありがとうございました。ご指摘と、後で時間がありましたらお答えいただけることがあろうかと思います。それじゃ、時間が参りましたので、発題の５を以上にて終わらせていただきます。ビュテル先生、平藤先生、どうもありがとうございました。（拍手）